

79. 長寿院諸堂の紹介

長寿院は彦根市古沢町に所在し、大洞弁才天の名でよく知られている。かつての石田三成の居城佐和山の北に続く小山で、東海道本線米原から彦根駅に入る電車はこの山裾にぎりぎりに接して左カーブし、しばらく直進して駅に達するのであるが、この寺は彦根城の北東でいわゆる鬼門に位置している。彦根城主は下屋敷玄宮楽々園から舟でこの寺に参詣したといわれるが、今は内湖が埋め立てられて陸続きになってしまった。舟で山裾に着いたとするとそこには現在、子安地藏尊をまつる小堂があり、石段を71段登ると「大宝王」と額をかかげた丹塗りの鳥居があり、更に24段を登ると彫刻を多用した立派な四脚門がある。更に石段は直進して71段を登ると楼門に達する。これで正面参道は166段の石段を登ったことになるが、現在脇道から経蔵を経て庫裡の下の駐車場まで到着することができる。楼門の正面に弁才天堂があり、その後方に更に48段の石段を上ると宇賀神の本殿があって、鳥居からこの本殿まで高低差はあっても一直線上に並び、そして遠く真正面に彦根城の天守を望む、まことに眺望のよい立地である。境内は弁才天堂に向かって左に護摩堂、その前に宝蔵があり、弁才天堂の右に阿弥陀堂が並び、その両堂の間のやや手前に手水舎、阿弥陀堂の右方に庫裡がある。

この寺の創立について「井伊家年譜」に大洞弁才堂は彦根藩四代目城主井伊直興が元禄8年(1695)領域の安泰と近江代々の故領主の霊を弔うため、領民から各一文の奉加金を募り、これに多額の藩金を加えて同9年藩寺として建立した記録がみられ、以来井伊家の独立佛堂として代々藩主により守護されてきたが、昭和17年真言宗醍醐派総本山醍醐寺別院長寿院となった。境内には前述のように沢山の堂舎が建っており、藩寺といえども既成の寺院と何ら変らず各機能に応じて造られている。この様な寺院建築群は近世の遺構とはいえ県内には数少ない。諸建物の内、弁才天堂、阿弥陀堂、楼門、経蔵、宝蔵の5棟が昭和41年に県指定になり、弁才天堂は昭和48年に重要文化財に指定された。これらの諸堂は建立以来度々修理されたことが知られるが、根本的な大修理がないまま300年近く経過し、

特に屋根の破損が著しくなったため、一連の修理計画をたて、昭和54年8月まず楼門の修理工事に着手して、55年10月に完了し、その素屋根を雨漏りのひどい経蔵に移し、昭和55年8月からは国庫補助事業で弁才天堂の修理にかかり、現在化粧軒廻りから小屋組に及ぶ木部修理と取替瓦の製作を進めている。以下修理工事中の一部を紹介する。

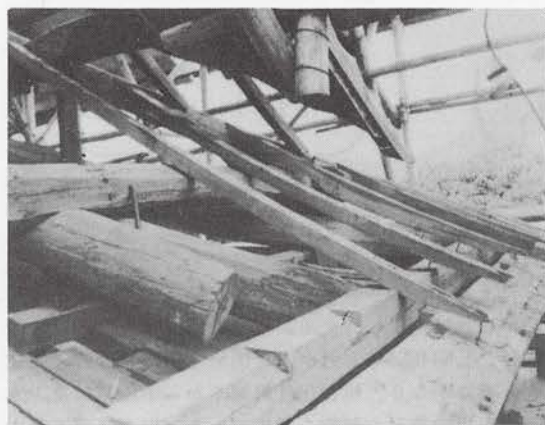
楼門

今回の修理工事中に建立年次を明らかにする資料は発見されなかったが、寺院の主要建築であり、弁才天堂に引続いて建立されたものと考えられる。

この楼門は全国の楼門の遺構で最も多い三間一戸の形式で入母屋造、本瓦葺である。外観は前代までに出揃った形式を大半踏襲しているが一部に次の特色がみられる。まず楼門の上階は三手先が多いがこの門は二手先で、禅宗様の尾垂木を用いていることと、中備は間斗で通肘木を受けその上は順次間斗、通肘木とで組上げる方法が多いが、ここでは間斗が双斗となる珍



楼門修理竣工状況



楼門軒先部の小屋組

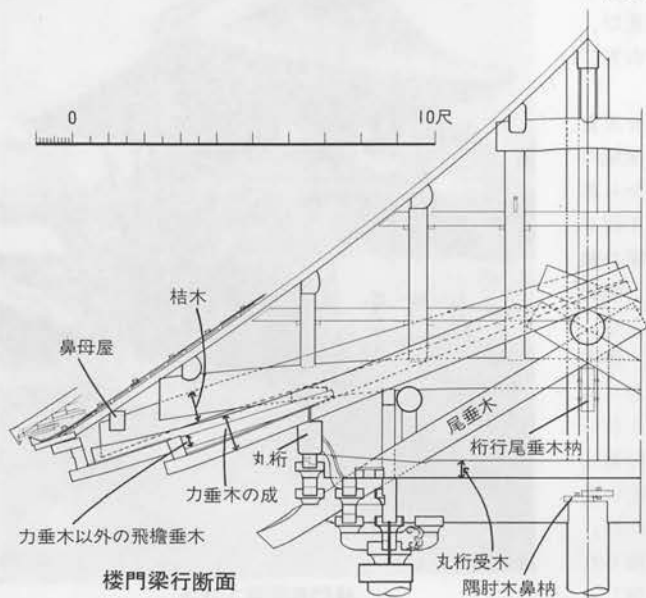
しい形式である。次に内部構造であるが今回の修理は屋根瓦葺替が主であるため必然的に調査範囲は小屋組廻りに限られた。小屋組構造も前代と大差はないが細部に新旧入りまじった手法が用いられていた。それは、飛檐垂木と地垂木を一木造りとした力垂木を10~11本目に配して軒先を支える工法を取り入れ近世建築では枯木が軒先部材を支えることを常識のようにしているのに反して、一木造りの垂木及び飛檐垂木によって茅負にかかる荷重を支え、枯木は古式的に鼻母屋桁を支える構造としており、また中柱位置で梁行方向に丸桁受木を入れて丸桁にかかる荷重を少しでも軽減する方法をとるなどの工夫がみられる。この様に中世以降用いられてきた枯木によって軒先荷重を支承することをせずに、軒廻りを堅固に納め、屋根荷重とは別々にそれぞれ直接柱に荷重を伝える工法であった。



楼門二階内部

弁才天堂

建立年次については前述にもふれたが現存の棟札（注1）により元禄8年から9年にかけて建てられたことが裏付けられる。この堂は本堂、礼堂、石の間からなり寺院建築には稀な権現造の形態である。権現造は元来神社建築の本殿形式の一つで本殿と拝殿の間を相の間で連結する形式で三種の異なる平面形のため当然屋根も複雑に変化する。この原型は平安時代にまで遡ると云われ近世の特に靈廟建築で盛んに用いられ基本形式が完成された造りである。彦根城主直興は弁才天堂建立前の元禄元年に日光靈廟建築修営に総奉行として関与していることから武将の権威を象徴する建築とするため弁才天堂を権現造にしたと考えられる。本堂は桁行五間、梁間三間で入母屋造の背面に一間通りの庇を取り込んだり、その後一間の向拝を設けた変則な形式からなる。内部は三間四方が内陣となるが、桁行の柱筋は背面通りのほかは側柱筋と異なる手法で類例は少ない。柱は円柱、組物は出組であるが背面底部分は出三ツ斗としている。石の間は桁行三間、梁間三間、礼堂は桁行三間、梁間三間入母屋造で唐破風造の一間向拝を設けている。組物は石の間が平三ツ斗組、礼堂が舟肘木で柱は共に方柱として本堂に比べると簡



楼門梁行断面

素な建物である。各屋根の妻飾りにも変化を付けている。礼堂妻は虹梁上に扱首組、大斗、肘木と一般に使われる古式な納め方に対して正面千鳥は虹梁上に太平束に出三ツ斗とし、本堂妻は前記の太平束に拳鼻を付加した珍しい形式としている。弁才天堂の外観は極彩色を施している個所を本堂は内法長押上斗拱迄、石の間は斗拱間、礼堂は唐破風廻り、そして各妻飾りと建築の一部に装飾を施し部分的とは云えども装飾の一貫性をもって建物全体の意匠的統一を計り伝統的な形式をそなえている反面、内部の本堂内法小壁及び虹梁上には欄間彫刻等を入れ、礼堂も含めて壁面には極彩色を施し、装飾過剰なところは元禄時代の建築の特色をよく表している。

次に今回の取降した瓦銘によって弁才天堂の完成年代が明確になった。今日まで棟札によって元禄8年着手して同9年に完成したことになるっており、工事規模



弁才天堂の屋根

等から推定して短期間であり完成年次は疑問視されてはいたが明らかな資料もなかった。ところが全ての大棟鬼瓦に「宝永元年申九月如意珠日」云々の刻銘があり宝永元年(1704)は元禄9年より9年後で屋根葺替又は取替時には早すぎることに、瓦葺工程上、鬼瓦取付は最終近くであることから完成年代は宝永元年と裏付けられる。その後の屋根瓦の修理については、大棟積の棟飾り瓦大半に寛政7年(1795)の刻銘があり宝永元年から95年後で創建後第1回目の屋根葺替が行われたと考えられ、その後115年目の大正8年(1919)に屋根全面葺替を行っている。大正8年の修理は枯木の約4分の1と、部分的ではあるが化粧軒廻りの材も取替えていることから第2回目の屋根全面葺替時と思われる。

阿弥陀堂

本地佛の阿弥陀佛を祀り、棟札が小屋組内に現存しており建立年代は弁才天堂と同じである。構造は桁行五間、梁間五間、入母屋造で正面に一間の向拝を設けている。平面は側廻り一間を外陣として内陣は正面三間、側面二間としているため桁行の柱筋の中央通りは側柱筋と異なり弁才天堂の本堂と同じ珍しい手法を用いている。側廻りは柱頂より12cm低いところに飛貫をとおして柱上は舟肘木とする簡素な形式である。内部については、内外陣境は内法小壁に弁才天堂と同様、欄間彫刻を入れたり、正面通りは中備を藁股とし、両側面は中備に平三ツ斗を用いるなど変化を持たせている。全体に外部は舟肘木で総丹塗りとした当時としては古式に倣った簡素な建築で、わずかに向拝廻り及び妻飾りの彫刻や彩色から華やかさが見られるが、内部は、外陣の海老虹梁をはじめ、彫刻類、斗拱、鏡天井板まで彩色を施し、武家好みである過剰なほどに装飾



弁才天堂正側面



阿弥陀堂の内外陣境



▲ 經 藏 宝 藏 ▶

をなし当時の特色をよく表した建物である。また内外陣境の欄間には象の交尾する姿が彫刻で表され、信仰と建築彫刻の関係の面白い一面を見ることができる。

經藏

建立年代は、請花に元禄拾貳年^巳八月吉日云々の刻銘があり明らかである。方三間、宝蔵造で、内部には、八角造の回転式経庫を備えている。この建物は禅宗様式を主体とした一重屋根で経蔵は二重屋根になるものが多い中で珍しい。又、外部の欄間としては禅宗様の弓欄間(波連子)に限られるために、この形式が多いがこの蔵の欄間は、各面共中央間を連子としたり、両脇間は嵌板として外側には別木の唐草彫刻を嵌め込み装飾した珍しい形式であると同時に当時代の特徴をよく表している。

宝蔵

建立年代は不詳であるが、主要建築物であり前述の一連の建物と同時期に建立されたものと考えられる。



宝蔵は桁行三間、梁間三間、校倉造、総丹塗りの素朴な建物であるが屋根は寄棟造がほとんどで、稀に切妻造もあるが、この蔵は入母屋造である。又束柱上の台輪上端をへ字形とせず水平としたり、妻飾は前包上に真束を建て棟木を受ける簡略な手法を用いているのも珍しい。県内では石山寺に残る遺構(未指定)と共に貴重な存在である。(大塚 博)

(注1)

弁才天堂棟札

(裏)	(表)
以理智不二	大檀那大梵天
是名法身塔	聖主天中
元禄八至九年正月大吉祥日	迦陵頻伽声
	哀愍衆生者
	我等今敬礼
	大願主帝釋天
	兼攝掃部頭藤原朝臣井伊氏直興
	總奉行 庵原助右衛門朝則
	西山集人員之
	作事奉行 内田原太夫宗虎
	武藤源介本平
	普請奉行 一瀬九左衛門吉利
	久野角兵衛恒高
	渡邊弥五左衛門水明
	棟梁 中澤喜右衛門氏重
	長谷川次郎兵衛吉勝
	羽森彦介光家
	居川佐右衛門政芳
	川瀬又右衛門常英
	羽森清右衛門正茂
	長谷川次郎兵衛吉勝
	應龍拜殿 大檀那四品行親衛門將兼
	寶藏華表



阿弥陀堂正面